

わあ〜っ
パパのせなかおっきい！

はは
そうだろ

これは遠い日の記憶。
とある休日、リビングでくつろいでいた俺は
真後ろの弾んだ声に頬をほころばせた。



とてもひろいから
みずほのうでじゃ
かかえきれないよ

背後から両脇に、自身の小さな両腕を差し入れ
左手指先と右手指先をなんとか突き合わせようとする
この女の子の名は瑞穂。俺の可愛い一人娘である。

瑞穂がもっと大きくなったら
ちゃんと両腕で抱えきれ
ようになるだろうな

見ての通り、瑞穂は俺をよく慕ってくれている。
まあ父親と娘の関係としては
この上なく幸せであることは間違いない。

ホント？

みずほがおおきくなったら
パパのからだ
かかえきれなくなるの？

ああ 本当さ

だから毎日
好き嫌いせずご飯食べないとな



たべるたべる！ だってみずほ
パパがつくるごはんだいすきだもん！

無邪気な返事を聞いた俺はふと、心の中で安堵した。
瑞穂にご飯を作ってあげられるのは、現状俺一人だからな。

そう、瑞穂の母親、つまり俺の妻は
一年前、事故で他界していた。

妻を亡くして以来、俺の心の支えになってくれたのは
忘れ形見である瑞穂であり
彼女もまた、父親である俺の存在を心の支えとしてくれた。

瑞穂には母親がいらない以上
俺が二人分の愛情を注いでやる。

そう思って俺は、毎日の仕事に
これまで以上に打ち込むようになったのだ。

ねえ おつきくなったら
みずほ パパのおよめさんにな
ってもいいかな？

おっ いいぞいいぞ
瑞穂が大きくなったら
お嫁さんとしてもらってあげるよ

この年頃の女の子が、父親を憧れの男性として
見ることは世間一般的にいつてよくあることだ。
そのことを知っていた俺は
言葉の上だけでも娘の好意を素直に受け取った

ホント？
やくそくしてくれる？

こんなこと言ってくれるのも
今のうちだけなんだろうな……

ああ

そう、今はいくら俺のお嫁さんになるって言うってても
実際に大きく成長したらきつと
見ず知らずの誰かのところに行ってしまう。

そのことがわかってるからこそ
娘の成長におけるこの時期を大事にしたい

やったー!!
みずほパパのおよめさん
になれるんだ

こうした想いは、世の中の小さい娘さんを持つ
お父さんならば誰しも抱くのだろう

いつか瑞穂も
俺の元を離れていく日が来るんだよな...

その日を想像してしまうと、ふと胸中に寂しさがよぎる。
この時俺は、成長した娘が俺以外の男性に対し
恋愛感情を抱くようになるのだろうと思っていた。

嬉しいな♪嬉しいな♪
パパのお嫁さん♪

ははっ

そう、この時はまだ…



ねえっ パパ

あれから十年経った現在
瑞穂は同じように背中から俺に抱きついていてた。

こらこら
そんなにくっつくのは止めなさい

フニッ♡

ええっ
何でえ

何でってなお前…

拗ねたような瑞穂に対し、呆れ気味に返答する俺。

…胸
背中に当たってるんだよ

いいじゃん別に…

そもそも
当たってるんじゃないくて
わざと当ててるんだよ…



そう言って瑞穂は、俺の背中にぐいぐいと
自らの豊満な胸を押し付けていく。

こっ こっ
そんなに胸を押し付けるなっ！

思わず赤面した俺は
娘に対し振り向かずには注意する。

俺の言葉を聞いていないのか
より背中に胸を押し付けてくる瑞穂。

背後から俺の身体を
抱きかかえる格好で、彼女は呟く。

ねえ
今日は一緒に
お風呂入らない？

な何を言ってるんだ…
ダメに決まってるじゃないか

何でえ？

別にいいじゃん
一緒に入ろうよ



瑞穂は成長したにも関わらず
父親の俺に対し未だ幼少期の
ように甘えてくるのだ。

昔はいつも一緒に
お風呂入ってたじゃん

またあの時のように
背中流してあげる♪

確かに俺と瑞穂は、幼い頃は毎日一緒に入浴したものだ。
だがそれはあくまで昔の話。

昔は昔 今は今！
だからダメっ！



ええっ 何それ
意味わかんないよ

私がパパが大好きな気持ちには
昔からちつとも変わってないのに…

あぁっ
「じつじつの」が「一番困る」っての…

頭を抱えなくなる。このように瑞穂は
十年前と変わらず俺のことを憧れの対象と見ていた。

娘から大好きだと言われて嬉しくないわけではないが
今では深刻な問題がある。それは……

いいでしょ
いいでしょ

ただ背中流すだけ
じゃなくて……

このおっぱいの柔らかい感触を
存分に味わうことが出来るんだよ……

……

再び赤面して押し黙る。
このように瑞穂が、成長した身体をわざとらしく
アピールしてくるのが問題なのであった。

そ　　そうやってお前が
ふしだらな真似をしてくるから
余計にだな…

えっ
ふしだらな真似しちや
いけないっての？

—！？

何気ない返事に驚く俺。

私別にパパ相手だったら
他の人にやらないようなふしだらな真似
しちゃってもいいと思ってるの

だからね…わざとこうして
胸押し付けてるんだよ

この言葉を聞いて
俺は愕然とした。

うすうす感づいてはいたが、瑞穂は明らかに俺に父親に対する思慕以上のものを抱いている。

それは恐らく、恋愛感情に限りなく近いものだろう。

だからこそこうして、一切躊躇することなく過剰なスキンシップを取ろうとするのだ。

ねえ
ねえ
ねえ
ってば

なっ 何考えてるんだっ！
今すぐ離れろっ！



俺は心底動揺していた。
実の娘とはいえ、ここまで胸を押し付けられると
思わず妙な気を起こしてしまいそうだった。

別にいいじゃん

全く離れる素振りを見せず
それどころかますます豊満な胸を
押し付けてくる瑞穂。

早く！

ついに俺は、ひととき大きな声で
怒鳴ってしまう。

はあい…

それまでとは違った厳格な態度に
瑞穂はようやく背中からそつと離れた。



すまん
怒鳴ってしまって...

ううん
気にしないで...

しまった...ついむきになっちゃった...

パパ...昔
私と約束してくれたこと
覚えてるかな？

.....？



忘れてるの？

昔私のこと
お嫁さんにもらって
くれるって約束したじゃない

ああっ…そういえば
そう言ったこともあったっけか…



お父さんは忘れてたかもしれないけど
その約束 今でも私信してるから…

—!—?

間違いない…瑞穂は俺のことを
父親として慕っている以上に
一人の男性として見ている…

「うっ これは明らかにやばいっ…!!」

なつ
なあ瑞穂…

なあに？パパ…

…先にお風呂
入って来なさい…

え？



唐突な振りに
きよとんとした様子の瑞穂であったが――

うん……



やがて素直にならずき、リビングから退出していった。

ふうふうふう…

しかしあのままなら確実にやばかったな…

やばいというのは
俺が瑞穂に対して性的な興奮を覚えてしまうことだ。



瑞穂は成長するに従い、亡き母親
つまりは俺の妻そっくりになってきている。

慈愛に満ちた瞳然り、優しげな表情然り
すらつとした体型に映える大きな胸然り……。

積極的にベタベタされるたび
どうしても妻のことを思い出してしまい
下手をすればそのまま抱き寄せたい衝動に
駆られてしまうのだ。

それにしても
一緒にお風呂に入ろうと
誘われたのには驚いたな…

一緒に入浴した娘に背中を流してもらおうというのは
世の中の娘を持つ父親ならば
ほとんどの人が経験するものだろう。

俺も例外ではなく
毎日瑞穂に背中を流してもらっていた。

ただ、うちの娘の場合は、年頃になってもいついかに
父親である俺と一緒に入浴することを
避ける素振りを見せなかった。

まあ、人によって個人差もあるからな…と
俺は暖かい目で見ていたのだが
さすがに小学校を卒業する年代になっても
一緒に入ろうとするのには驚いた。

この頃になると、体つきが幼い時よりだいぶ異なってきたおり
全体的に丸みを帯びた
いわゆる女性らしいものへと変化していた。

その時になって俺ははじめて
娘と一緒に入浴することを拒否するようにしたのだ。

シャワーが流れる音が聞こえてきたな……

今頃瑞穂は
身体を流しているのか……

サアアアツという水の音を聴くと
否が応でもバスルームの情景が脳裏に浮かんでくる。

そこには当然、一糸まとわぬ瑞穂の姿があるはずだ。

「くっく…」

成長した娘の裸身を思い浮かべ
思わず生唾を飲み込んでしまう。

いっ…いかん！ こんなことでは…

頭をぶんぶんと振り
湧き上がってきた煩惱をなんとか打ち払う。

いくらなんでも
実の娘に対して欲情してどうする…

瑞穂はあくまでも俺の娘…。
そう、大事な一人娘なのだ。

父親としてなすべきことは
娘を正しい方向に導いてやること……。

そうこのまま瑞穂が 父親である俺に対して
これ以上恋愛感情がエスカレートしていく事のないように……

妻が亡くなったその日から
俺が瑞穂にとっての唯一の肉親になった。

そして俺はまだ幼かった瑞穂に
妻の分も愛情を注いでやろうと心に誓った。

これまでの十年間、俺と瑞穂は共に泣き笑い
互いの心の間隙を埋め合ってきた。

その中でいつしか、瑞穂にとって俺は
単なる父親以上の存在へと変化していったのだろう。

異なる異性との付き合いというものを全く知らないまま
一番身近な異性である父親と必要以上に
親密にせざるを得なかった弊害と言える。

実際瑞穂は、これまで俺以外の男性に対し
心を開くことがなかった。

せめて瑞穂に、俺以外で好きになれる
男性が現れてくれれば……

父親以外の男性に対し心を開いてくれれば
やがては恋愛感情に発展し、他の人と同じような
恋愛を楽しむことができるだろう。

そこまでいったら、今俺に対して抱いている思いが
間違っていることに気づいてくれるはず……。

だがそのためにはまず
必要以上にベタベタしてくるのを
断固止めさせねば……

くんくんっ…

右手に掴んだトランクスを鼻先に近づけ
漂ってくる匂いを嗅いでみる。

ああっ…
これがパパの匂い…



パパの匂いを嗅ぎ続けていると
なんだか妙な気分になってくると同時に
お腹がジンとしてきちゃう。

んあっ…

パパの背中
広がったなあ…

あふっ…



今日後ろから抱きついたときの記憶が蘇ると
ジンとした感覚がどうしようもなく
強くなってくるのがわかつちやう。

ダメ…
我慢できないよお…

私はおもむろに
むき出しの秘部に指先を伸ばす。

しゅちゅ♡

ひゅっ……!

そっと触れた指先に
じめつとした感触が伝わってくる。

もう
濡れてきちゃったみたい……

しゅっ♡

しゅっ♡

あっうっ
いっ いっ いん...

んあっ...あっ
あっああ...

すぐに私は
濡れてきた割れ目を指先でなぞりはじめた。

しゅっ♡
しゅっ♡

指先でなぞっていけばいくほど
ジンとした感覚がお腹で強くなっていき
口元から声が漏れてきちゃう。

んあんあんあああつ…
好きいつ好きだよおつ…パパ…

湧き上がる気持ちよさに声を上ずってしまい
パパに対する思いがただ漏れになってしまう。

ここが自室で、パパは隣の部屋で
寝静まっていると分かっているでも
ドキドキしちゃう。

しゅっ♡

しゅっ♡

毎回やってることは同じでも
やっぱり聞かれたりしないか心配になっちゃうな…

そう、これは常日頃行っている私の日課。

くちゅっ♡
くちゅっ♡

パパが寝静まったのを見計らって
脱衣場からこっそりパパの下着を持ち出してきてから
服を脱いでベッドに座ってのオナニー。

んっ…はうっっ…あっあっ…

んっんっんっ
んんんっ…

こんなこと、ホントはいけないことだっと思ってるけど…
それでも止められないのは
私がパパのことをあまりにも好きすぎるから。

しゅっ♡

しゅっ♡

あっ…あっ…
んっ…

んあっ…
あんああんっ…

どうして私は、自分の気持ちを抑えることができないんだろう。
頑張って抑えようとしても、パパに対する
想いは日に日に強くなっていくばかり…

くちっ♡

くちっ♡

友達とか先輩に聞いても
みんなお父さんにはそんな感情を抱かないって言うし…
やっぱ私、おかしいのかな？
でも好きなのは、紛れもない事実だし…

んっあっああん…
やっはっはああっ…

しゅっ♡

しゅっ♡

やっぱり私、もうパパへの気持ち
抑えられなくなってきたよ……！

あっあっあっ……うっうっうっ……やあっ
あはうっあんあああっ……！

ぱっ
すきいいっ……！
パパあっ……好き

もう指先の動きは、
自分でも止められない。

くちっ♡

くちっ♡

はあっはあっ くんくん

くんくんくんっふっ...
うっうっうん...

ももっ...
イッちゃっよおおおっ...!

ふしゃあ

いつもより仕事が忙しく
すっかり帰宅が遅くなってしまった俺が
リビングルームで見たもの。

「これは一体…」

それは、バスタオル一枚というあられもない格好でソファ上で眠る瑞穂の姿であった。

しかも……お尻と胸が見えている……

バスタオルの布地が覆い隠しているのはあくまでも腰のみ。



おそらく今日も、風呂上がり「に」まで来て
つつい寝てしまったのだろう。

全く：エアコン点けっぱなしだったのに…
このままじゃ風邪引くぞ

しょうがないやつだな…

俺は苦笑いをし、リビングに置いてある仮眠用の毛布を
両手で掴むと、おもむろに瑞穂の元へ近づく。

んっ…いい匂いだな…

そこで俺は、風呂上がりの瑞穂の身体から
良い香りが漂ってくるのに気づいた。

くんくんっ…

思わず鼻をひくつかせる。
爽やかなボディソープの香りに若い女性特有の甘さが
ブレンドされた、何とも魅力的な芳香であつた。

ああっ…本当にいい匂いだ…

無意識のうちに俺は腰をかがめ
鼻先を瑞穂の身体へと近づけていた。

—!?!?

目に飛び込んできたのは
露出した胸の先端。

やばっ……つい間近で見ちまった……

桜色の乳首が脳裏に焼き付いて離れない。

いかにいかに
こんなことしてる場合じゃ……



腰を持ち上げ、いそいそと手にした
毛布をかけようとする。

だが、見事に発育を遂げた
娘のナイスバディが視界に飛び込んできて
思わず手が止まってしまう。

しかし本当にいい身体つきだな……

……



しばらく無言で
艶めかしい全身を
じろじろと見つめてみる。

んぐくっ…

生唾を飲み込む。
気づけば股間も
むくりと勃起してきた。

ちよつとだけ…ちよつとだけなら…

魔が差すというのは、まさに「このことを言うのだから」。

衝動的な欲求に負けた俺は
片手をそつと、むき出しの瑞穂の生尻に差し伸べる。

さわっ…



おお！！
すべすべだな。。。それに熱い。。。

何て良い手触りなんだ！



「う……これは……つい押したくなるな……」

起きない様子だしちょっとだけなら……」



そのまま、指先を尻肉に沈み込ませる。



おお…柔らかい…!!
これは何度も押したくなる衝動に駆られるな…

指先に伝わる弾力と
ぬくもりを、じっと感じ取っているよ……

何してるの お父さん



ふと顔を上げるとそこには
じくつとこちらを見る
娘の眼差しがあった。

……!?

やばいっ……!

ねえ
何してるのお父さん?

にんまりとした笑顔で
瑞穂は俺に尋問をはじめた。

やあ瑞穂…
そんな格好のままにいると

風邪引くぞ…

ようやくお尻から手を離し
俺はなんとか話題を変えようとする。

「ごまかしたって無駄だよ」

パパさっき私のお尻触ったよね
どうしてお尻なんて触ったのかな？

そそれは…

あれ？
質問に答えられないなんて
おかしいよね



半身を起こし
にこやかな表情と声色で瑞穂は言葉を続ける。

うふふっ…実はあれでしょ？

私のむき出しになった
おっぱいとかがお尻とか見て
興奮しちゃったからだよね…？

そ…そんなことは



嘘つき…

その証拠に…

にわかに立ち上った瑞穂は
俺の真ん前でしゃがみ込む。

股間
ずいぶんと突っ張ってるよ？



——！？

眼前の、
ビンと TENT を張ったかのようになっている
俺の股関節を眺め、瑞穂はいたずらっぽく声で訊いてくる。

やばいぞ……これこそ言い逃れできないじゃないか……

ふふふふ……これってつまり
実の娘で興奮していたってことで
間違いないよね？

そう言うと瑞穂は、指先でそっと
目の前にあるズボンのジッパーをつまんで引っ張ると
飛び出てきた男根を右手で掴んだ。



そして、男根の亀頭から根本、根本から亀頭へと
指先をゆっくりスライドさせはじめ。

お…おいっ…
な何してるんだっ…？

何ってわからない？
これ手コキっていうんでしょ？

手コキ…

もしかして瑞穂は
俺を性的に気持ちよくさせるつもりなのか…

しゅっ

こらっ
こんなことは止めるんだっ！

ぎゅっぎゅっ

そりゃ
父親と娘でする行為じゃ…

どうして
父親と娘でしちやいけないの？

しゅっ

えっ…！？

予想外の返答に言葉を詰まらせる俺。

パパはこうして
実の娘の私で性的に興奮しちゃって…

そんなパパのことを
私はいつでも受け止めてあげるってのに…

しゅっ

ぐっ…



あのね
パパが私のこと見てドキドキしてるって
前からちゃんと気づいてたよ

しゅっ

何だって…



だから私 パパにだったら
そういうことされてもいいかなって思っ

しゅっ

…最近
積極的にベタベタしていたのも
そのためなの



でも
パパったら自分の気持ちに嘘ついて
必死に抑え込んでばかり…

しゅっ

でも私はダメ
自分の気持ちに嘘つけないし
どうしても抑えておけないのっ！

瑞穂…

だからね
お風呂上がりになつてとこんな格好して
ソファに狸寝入りしてたんだよ…

しゅっ

胸元もはだけさせて
パパが興奮しちゃうようにね…

そして実際、興奮してくれた…

だからね…今日は私が
パパの気持ちを受け止めてあげる…

しゅっ

そう言って瑞穂は、
男根をしごき上げる右手の動きを大胆にしていく。

くっ…ああっ…

しゅっ

いきり勃った男根にしなやかな指先がぐにぐにっとくい込んでいき、少し痛いような強めの圧迫感がなんとも心地よい。

ふふっ パパったら
気持ちよさそうに声
漏らしちゃって…

「ジョジョ」これはたまらん…

いいよ…その調子で
どんどん気持ちよくなつて…

しゅっ

あつ 先っぽから透明な
お汁が溢れてきてるよ？
これつてしゅっぱいんだよね？

…そう言われてはいるな

…確かめてみよっか

…えっ？

